

## 平成30年度 第1回屋久島世界遺産地域における高層湿原保全対策検討会

### 議事要旨

日時：平成30年9月21日（金） 14:00～16:30

場所：鹿児島市「天文館ビジョンホール」

#### ●確認事項

##### 資料1 屋久島世界遺産地域における高層湿原保全対策検討会設置要綱(案)

- ・事務局（案）を承認し、設置要綱（附則）について、平成30年9月21日から施行する。とする。

#### ●議事(1)高層湿原保全対策検討会の今後のスケジュール、検討内容等について

##### 資料2 検討会の設置趣旨、スケジュール、検討内容等について

- ・本業務で得られたデータは学術的に大変貴重なデータになる。科学委員会へ本検討会の進捗を提示して議論してもらうことは大事ではあるが、一方で、世界遺産地域として科学的な研究データとすることや、公表の仕方も検討すべきである。（井村委員）
- ・報告書だけにおわらず、学術研究論文として公表するというくらいの重要なデータになるので、様々な人が利用できるようなデータにしてもらいたい。（百原委員）

#### ●議事(2)高層湿原の状況変化、現状等について

##### 資料3 高層湿原の保全対策の検討に係る現状整理

##### 資料7 高層湿原集水面積区域図

##### 参考資料3～11 高層湿原現状等写真

##### ドローンによる動画視聴(花之江河9分14秒、小花之江河1分41秒)

- ・両湿原は、集水面積では約10倍、湿原面積では約2倍の差がある。花之江河は集水面積の大きさが、供給された水の移動に影響しているのかもしれない。（下川委員）
- ・花之江河は集水面積が大きくて、湿地面積が広い分だけ、降雨による水位の変化にタイムラグが生じる。小花之江河は集水面積も狭いし、湿地面積も狭いため、水位の変化がてき面にでる。降雨が湿地にどう反映するのかわかるため、水位や雨量を観測する必要がある。（井村委員）
- ・湿原内の流れは、表層を流れていくのか、地下から湧き出してくる箇所もあるのか把握する必要がある。（百原委員、井村委員）

#### ●議事(3)高層湿原において過去に実施した調査結果及び対策等について

##### 資料4 高層湿原におけるモニタリング調査及び保全対策の歴史年表

##### 資料5 高層湿原で行われている各モニタリング調査の整理

##### 資料6 屋久島島内雨量の経年変化

##### 別添参考資料1 屋久島における過去6300年間の地形の安定性の変化(1984年3月相馬秀広著)

##### 配布者限り ハベマメシジミの現状

##### 当日配布 花之江河、小花之江河の植生群落分布の経年変化

- ・土壌断面の調査結果ではジャクシンが出てきたとあるが、葉や枝が含まれていれば周りから流入した

可能性もある。相馬氏の報告書には、地質断面から土砂流入がかなり活発だったと推測していることもあり、確認されたビャクシンの根については、詳細に調べる必要がある。(百原委員)

- ・土壌堆積量の変化は、雨量とどういった関連があるのかどうか。(寺本)
- ・昭和63年に環境庁で策定した保全管理計画に基づいて、どのような保全対策をした結果、どういった影響なり効果があったのかを整理しないと、過去に対策したことを踏まえた議論ができない。過去の報告書をPDF化して閲覧できるようにしてほしい。(井村委員、百原委員)
- ・資料5にある花之江河の冠水域経年変化では、平成18年には水路の密度が増えている。これは、浸食が進み、下流側の水位が低下して浸食基準面が変わったことによって、水路の密度が増えたのかどうか。現時点では、原因を明確にはできない。(下川委員)
- ・資料5の花之江河の水路の密度が増えた要因としては、平成13年、14年に登山道整備で湿原への流入土砂対策をした場所になる。土砂が入ってこなくなったことが影響していることも要因の一つと考えている。当日配布で定時した植生群落図の平成9年度時点では、登山道周辺にマサ溜まりがあったが、それから下流域に流されている。湿原の中でも土砂が動いていることがわかる。(事務局 関根)
- ・昭和50年代には、湿原内でテントを張っていたと屋久島科学委員(大山委員)から聞いている。湿原内にはミズゴケの他にイグサも確認されており、テント設置できる程度に乾燥していたと推測される。(事務局 関根)
- ・年代測定、成立過程を把握するには、これまでの断面調査よりも深めにボーリングが必要かと思う。地層に含まれる植物遺体も調べると、植生の変遷も単なるイネ科ではなく、詳細に把握できる。環境が変わったときに本当に回復するのかとか、乾燥化するとどうかとか、将来予測するにも必要となる。(井村委員、下川委員、百原委員)
- ・ハベマメシジミの資料には「約6300年前に噴火した幸屋火砕流によって形成され、泥炭層は、およそ2600年～2800年前に形成されたとされている。」と記載があるが、ハベマメシジミはいつからここに生息しているのかが、湿原の成立に関することでもあるので考えていきたい。(下川委員)
- ・相馬秀広氏の報告書(70ページに断面図)からは、いろんなところから土砂が入って、出口辺りに土砂が溜まると湿地になり、別のところに入ると流路が変わってという変遷がこの断面に現れていると思う。(井村委員)
- ・相馬秀広氏の報告書からは、かなりマサ土が流入しているような環境が続いた時代と、湿原植生が発達した時代が繰り返されているというイメージが持てるが、それはこれから確かめることになるかと思う。(百原委員)

#### ●議事(4)第2回検討会について

##### 資料8 第2回検討会 現地視察ルート(案)

- ・花之江河は集水面積が大きいので、小花之江河よりも時間をとって土砂堆積、流路状態、土砂供給箇所、水の収支などの状態を確認した方がいい。先に花之江河を視察してから小花之江河を視察する行程とした方がいい。(下川委員、環境省 柘植首席保護官)
- ・現地視察で土壌を観察する際には、流路の削られている縁をみると広域にどうなっているのかわかると思うので、そういった場所を観察すると、どこを掘ればいいのか目処が付くと思う。(百原委員)